

# 《2007年1月例会報告》

【日 時】2006年1月19日（金）19:00～21:00（→その後「なかい」～12:30）

【会 場】筑波大学附属高校体育館1Fミーティングルーム

【テーマ】百年構想最前線—地域リーグ決勝大会から見たこの10年の変化

【発表者】宇都宮徹壺（写真家／ライター）

【参加者（会員）】麻生征宏（学研） 牛木素吉郎（ビバ！サッカー研究会） 宇都宮徹壺（写真家／ライター） 宇都宮みちこ（ビバ！サッカー研究会） 塩沢拓也（長野高専／AC長野パルセイロ） 田中理恵（アマチュアカメラマン） 徳田仁（榊セリエ） 中塚義実（筑波大学附属高校） 藤田直樹（ビバ！サッカー研究会） 室田真人（NPO法人九曜クラブ／中央大学） 矢野英典（サッカーファン／スポーツの研究を勝手に） 山田智子（フリーカメラマン） 依藤正次（NPO法人横浜スポーツコミュニケーションズ）

【参加者（未会員）】早川絵美・鬼川和佳子（サッカーファン）他1名

【報告書作成者】塩沢拓也

注）参加者は所属や肩書を離れた個人の責任でこの会に参加しています。括弧内の肩書きはあくまでもコミュニケーションを促進するため便宜的に書き記したものであり、参加者の立場を規定するものではありません。

\*\*\*\*\*

## 百年構想最前線

—地域リーグ決勝大会から見たこの10年の変化—

宇都宮徹壺（写真家／ライター）

\*\*\*\*\*

### 【第30回全国地域リーグ決勝大会報告】

#### ■はじめに

宇都宮：宇都宮と申します。今日はよろしくお願ひします。今日は「百年構想最前線」と題して、昨年の11月下旬から行われた、第30回地域全国地域リーグ決勝大会のレポートをしたいと思ひます。地域リーグは、J1をトップリーグと考えると、上から数えて4番目です。J1、J2、JFL、その下が各9地域リーグです。その地域リーグこそ、Jリーグが掲げている百年構想の最前線的なポジションにあるのではないかと、かなり確信をもった仮説を元に、一昨年から、各地域リーグを追いかけ、取材活動を行っているところです。

1次ラウンドが昨年の11月24日から26日まで、決勝ラウンドが12月1日から3日まで行われました。この頃サッカーファンの関心はどこにあったかというところ、1次ラウンドはJ1、J2の最終節で優勝はまだ決まっていな、昇格がどこになるのか、皆がトップを見据えていた時期です。決勝ラウンド、12月1日は入れ替え戦があった頃だと思ひます。この時期にJリーグを見ずに高知、大分まで行って大会を見ていた私はいったい何なのだろうと。このとき僕は自分で行っていたのですが、Jリーグを見ている場合じゃないという状況でした。レッズが優勝し、カップを掲げたシーンも後になって見ました。それぐらいはまっております。まず、皆さんに説明するまでもないJリ

ーグのピラミッドです。これは、とある地域リーグからJを目指す、九州にある某クラブのホームページから引っ張ってきたものです。都道府県リーグから地域リーグに上がります。この地域リーグも地域によって、例えば関西、関東、東海もそうですが、1部、2部と分かれている所もありますし、そのまま地域リーグ1部のみという所もあります。注意しなければいけないのが北海道です。北海道は道リーグというのが、地域リーグとは別にあって、道の中にいくつかの地域に分かれたリーグがそのまま都道府県リーグに参加するようです。僕はまだ北海道リーグは取材していませんが、いずれにせよ、全国9部ブロックあります。その上にアマチュア最高峰と呼ばれる、日本フットボールリーグ（JFL）があるわけです。その地域リーグからJFLに上がるためには、全国地域リーグ決勝大会、さらに入れ替え戦を経て、初めてJFLに昇格することができるわけです。これはピラミッド上にいつも説明されているのですが、僕はここが一番過酷な階段だと思っています。

今期（2006年）の場合、各地域リーグ、9地域のチーム数合計数が73です。だいたい8チームずつぐらいです。九州リーグだけが9チームでやっていましたが、今、日本の4部に所属しているチームが73、このうち上がれるのが1.5です。つまり、この地域リーグ決勝大会に優勝したチームは無条件で、準優勝したチームはJFL最下位のチームとプレーオフを行う、ゆえに1.5です。ちょうどこの地域リーグ決勝大会が行われようとしていた頃、「ロッソ熊本問題」というものがありました。要するにロッソ熊本がJ2に上がれば2チームが無条件で上がれる。結局ロッソはJFLを5位で終わりました。もし3位だったら、ザスパ草津の例がありましたので、（J2に）行けたかもしれないという話もありました。もう一つ、J2が今13チームですので、さすがに偶数に戻したいだろうという思惑もあり、もしかしたら特例の特例が出るのではないかと話もありましたが、最終的に特例はなしということで、1.5/73という数字は変わりません。

### ■第30回地域リーグ決勝大会 -参加クラブ-

宇都宮：今回の出場チームを北から紹介します。ノルブリッツ北海道FC、これは北海道の代表です。たぶん旧北海道電力で、北海道では図抜けた実力を持つクラブです。東北からは、TDKサッカー部、秋田です。かつてJSL時代にJSL2部に所属していたらしいです。もうひとつ東北にはグルージャというクラブがあるのですが、グルージャがなかなか勝てない、東北を代表するクラブです。北陸はジャパンサッカーカレッジ。天皇杯でもよく聞く名前ですが、ここは実質的には学校組織になっているのですが、アルビレックス新潟と非常に密接な関係にあり、ある種、学校という形態をとりながらの下部組織的な存在です。ここから選手が若干名トップに上がったり、アルビレックスのコーチが教えに来たりとか、そういった人的交流があり、激戦区の北信越の中で優勝したという意味でも非常に注目されるクラブです。関東からは2つ、本田ルミノソ狭山と横浜スポーツ&カルチャークラブ、この2チーム、僕はあまり見たことがないので説明できませんが、どなたかどうですか。

依藤：NPO横浜スポーツ&カルチャークラブというのはYSCCと呼ばれ、横浜市の保土ヶ谷区を本拠地とし、保土ヶ谷サッカー協会が主体となっています。すぐそばのチームなので、熊谷の予選リーグを見に行くと、もし決勝トーナメントまで勝ち進んでしまったら、私は九州に行かなければと。1戦目は勝ち、2戦目はTDKに負けて予選敗退でした。本当に地域密着型のスポーツクラブなので、全然お金がないので、もしJFLに上がったなら運営費はどこから出るのだろうと心配です。

宇都宮：おっしゃる通りで、本田ルミノソに関しても本当は上がりたくない、という本音があります。けれども、決して、わざと負けているという言い方は口が裂けてもいえないのですが、何かそれに近い負け方をいつもしています。それが本田ルミノソ狭山という風なのが僕の認識です。東海リーグからはFC岐阜と静岡FCです。実は東海リーグは枠が1つしかありませんでした。FC岐阜が優勝、静岡FCは準優勝で今回出られなかったのですが、全国社会人大会、全社という大会があり、

今回の全国地域リーグ決勝大会は、全社で優勝またはそれに順じる成績を収めたチームは出場できるという出場枠が増えました。静岡 FC は決勝まで上がり、決勝で長崎の V・ファーレン長崎に敗れはしたのですが、V・ファーレンが九州リーグで代表権を獲得していたので、準優勝でも全社枠で静岡 FC は出場できます。関西からは 2 つです。バンディオンセ神戸、昨年も出場していて決勝リーグに出場しているチームです。神戸第 2 の J リーグ入りを目指すクラブです。天皇杯で J2 のチームを破って 4 回戦まで行きました。あと FC Mi-0 琵琶湖 Kusatsu。非常に長い名前ですが、このチームは関西リーグ 2 位で今回出場しています。中国リーグからはファジアーノ岡山。このチームも J リーグ入りを目指しているチームで、岡山から J を合言葉にしているチームです。もうひとつ四国から、カマタマーレ讃岐です。これは名前を聞いたことあると思います、ネタか本気か、カマタマーレという感じで。香川と言えば讃岐うどん、エンブレムもうどんです。

依藤：ちなみにこのチームは、漫画家の石川じゅんさんが、「うどん一年分くれたらキャラクター書くよ」とホームページに書いたら、次の日、本当にクラブの人がうどん一年分持って吉祥寺にある石川さんの事務所までお願いしますと行ったというほほえましいエピソードがあります。

宇都宮：九州からは新日鉄大分サッカー部、いわゆる企業チームとしては非常に強豪として知られているところ。それと V・ファーレン長崎。V・ファーレンが今回九州リーグ優勝、2 位が新日鉄大分ということで全 13 チームです。

1 枠と 2 枠ある地域がありますが、これは、前年の大会で、決勝大会に出場した地域から、次のシーズン 2 チーム出られるということです。つまり、関西のバンディオンセが昨シーズン決勝リーグまで出場した、よって今回はバンディオンセと FC Mi-0 琵琶湖 Kusatsu 2 チームが出場する。関東も、ジェフユナイテッドアマチュア、今ジェフクラブというチームがやはり決勝リーグに出場し、JFL へ昇格しましたので 2 チームです。九州に関しても、ロッソ熊本と FC 琉球、2 チームが決勝に行き JFL へ昇格した。ということで、2 チームです。このほかに、条件としては大学クラブの出場も認めているケースがあります。これはパンフレットに書いてあり、全日本大学サッカー連盟からの推薦があれば、大学クラブが地域リーグ決勝大会に出場することができる。たぶん、流通経済大学とかは、これを通ってきたのでしょう。それと興味深いのが「飛び級制度」。日本サッカー協会より、地域リーグトップカテゴリー以下のリーグから飛び級で出場が認められる場合があります。ちなみに、現在までにこれが適用されているのは、2003 年の関東社会人リーグ 2 部からの参加が認められたザスパ草津のみ、特例の唯一の例です。これは推測ですが、ザスパがあまりにも急に J に行き、戦力的にも経営的にも苦しんでいるという現状を考え、この飛び級制度はその後用いられていないのではと思われま。飛び級したいクラブは地域にたくさんありますので。

## ■地域リーグ決勝大会一次ラウンド -高知-

宇都宮：僕は 1 次ラウンド、高知の方に行ってきました。FC MIO 琵琶湖が初戦でいきなりカマタマーレを 6-0 で粉砕しました。その裏の試合で、静岡 FC 対 FC 岐阜という、東海リーグの強豪チーム同士が、たまたま静岡が全社で準優勝したため、1 次リーグでいきなり激突するというスリリングなカードがありました。ちなみに FC 岐阜の監督は戸塚哲也さんです。静岡 FC の総監督は三浦泰年さんです。つまり読売対決、そういう意味でもすごい注目のカードでしたが、岐阜が見事静岡に競り勝ちました。そのあと、FC Mi-0 琵琶湖が静岡 FC まで 4-3 で破りました。すごくスリリングなカードでした。最終節は FC 岐阜と FC Mi-0 琵琶湖 Kusatsu の 2 勝同士の直接対決で、結果は 7-0。やはり岐阜は強かったと。

ここで大活躍したのが 32 番の池元友樹選手です。つい最近柏レイソルへの移籍が決まり、三階級特進です。池元選手は高校が東福岡で、その後アルゼンチンへ渡ったりして、U-19 か何かに選ばれ

ました。その後、ニューウェーブ北九州という九州リーグのチームに移籍し、そこで全社の得点王になりました。全社で得点王になったのを戸塚さんが見つけた、しかもニューウェーブの監督が、確か千疋さんという読売出身の方です。戸塚さんが千疋さんに連絡したところ、すでに6チームぐらいから引きがあったのですが、戸塚さんだから使ってやってくださいとなりました。

このFC岐阜というチームは、元名古屋グランパスの森山を中心として、Jリーグ経験者、ロートルと呼ばれる人たちも結構多いのですが、キーパー以外はJリーグ経験者で埋めることができるスーパーチームです。ただ、戸塚さんは信頼できるストライカーとキーパーがほしい。それさえあれば後はOKという感じで、この池元に白羽の矢を立てたのですが、馬鹿当たりしました。

1次ラウンドで敗退したFC Mi-0 琵琶湖 Kusatsuは、滋賀を本拠地としています。その前身を調べると、佐川急便京都サッカー部が母体で、最初は京都でやっていました。ところが、クラブがなくなるということで、滋賀にあったジュニアのクラブと合併するような形で新チームを立ち上げたのがFC Mi-0 琵琶湖 Kusatsuです。地域リーグ決勝大会では、レンタル選手を無制限に採れるという不思議なルールがあり、ここも7人最初採ったのですが、うちKリーガーが一人で、韓国人選手が3人ぐらいいて、うち一人はホームシックで韓国へ帰ってしまった。レンタルすればチームがそのまま強くなるかというところではなくて、地域リーグ決勝大会のジンクスになっています。ただこのFC Mi-0 琵琶湖 Kusatsuの場合は、非常にシンプルな戦術で、両サイドに、よく走ってうまいクロスを入れるキッカーがいて、それに合わせる真ん中のやつがいて、そのパターンで7、8割方ゴールできます。あとは金子豊という、愛媛にいた選手を引っ張ってきて、すごいFKを決めます。それがほとんどです。つまり戦術をガチッと決めて、そこにうまいやつをおいて、行って来いといった感じのシンプルな戦術であれば、ある程度レンタル選手が機能するという典型例でした。

カマタマーレは初戦でMi-0に大敗したわけですが、経済的基盤がないということもあり、レンタルなしで挑みました。一応、元Jリーガー2人がいて、ジョという元中国五輪代表選手がコンサドーレから移籍して来ており、四国ではそこそこ強いチームでした。しかしキャプテンで、戦力的に欠かせない選手が、初戦にはいませんでした。監督さんに聞くと、仕事で来られませんでした、とのことでした。でも、それは当然で、もともとこれは社会人のチームが全国リーグに行くための大会でしたが、いつの間にか、Jを目指すクラブがしのぎを削る、ハイレベルな大会になってしまったのです。ここ2、3年、特に今回は、僕が取材をしてきたチームが沢山出ていた、すなわちJを目指すクラブが今までで最も多く参加した大会だったのではないかと思います。急にレベルが上がってしまった。ということで、カマタマーレも四国第3のJクラブをというスローガン掲げやってきたわけですが、まだまだアマチュア色が濃かったが故に、これだけの差が出てしまったということが言えると思います。

1次ラウンドの結果です。4会場に分かれて、そのうちAグループ、Bグループが長崎の島原で行われました。なぜ長崎で行われたかと言いますと、小嶺さんの政治力です。ちなみにV・ファーレンは小嶺さんが社長をやっています。Cグループが神戸、Dグループが熊本です。それぞれ1位通過したチームが決勝リーグに進めます。ただ、この大会は非常に不思議な大会で、まず、なぜ13チームという半端なチーム数でやるのか、これはひとつの謎です。よって、ひとつだけ4チームのグループがあり、高知のCグループがそうでした。しかも、24、25、26日と連続です。ところが3チームのグループの場合、中日で休めるチームが出て不公平です。さらに、ここでもらったイエロー、レッドは決勝ラウンドまで持ち越されます。ということは、Cグループの場合、試合数が多い分、不利です。最後にもうひとつ不思議なルールがあり、リーグ戦なのにPK戦があります。TDKサッカー一部は、最初PK負けしています。これも象徴的な全国地域リーグ決勝大会ローカルルールです。90分で決着付かない場合は即PK戦。PK戦で勝てば勝ち点1、負ければ勝ち点0です。

ファジアーノ、V・ファーレン、FC岐阜、TDKサッカー部の4チームが決勝リーグに残りました。私はこのうち、TDKサッカー部を除く3チームは、連載しております「マタタビフットボール」で

取材していましたが非常にラッキーでうれしいな、どこを応援しようかなという感じでした。TDKの昇格はないだろうと、このとき誰もが思っていました。

## ■地域リーグ決勝大会決勝ラウンド -大分-

宇都宮：決勝ラウンド大分、いきなり優勝候補と思われた V・ファーレンがファジアーノに敗れるという波乱が第1試合で起き、しかも FC 岐阜が TDK にこれまた破れるという大波乱が起きました。どうでした？ 当時を振り返ってみて。

山田：当時を振り返ると、まず負けるとは思っていませんでした。1位で昇格するというのを、誰もが信じていました。そういう油断もあったのですが、負けたことはとてもショックでした。しかも試合が3日間連続であるので、次の日に気持ちを持っていこうとするのですが、なかなか切り替えられないという状況でした。誰もが、一年間やってきたのにどうなるのだろうと気持ちで、暗い一日を過ごしました。

宇都宮：第1日目を終えて、ファジアーノが1位、TDK サッカー部が2位、FC 岐阜3位、V・ファーレン長崎4位という状況になりました。ファジアーノに関しては、ここも何人かレンタルで選手を入れていますが、ブラジル人のジェフェルソンという選手がいて、地域リーグ決勝大会にブラジル人が出てくるわけです。確か横浜 FC にいて、185 cm で“反則だ”と言っていました。この選手が前線で張り、競ったセカンドボールをうまく拾って決めるという、やはりシンプルな戦術です。V・ファーレンをいきなり突き落とした。TDK に関しては、片桐一人に対して、4人でいっていました。片桐は岐阜工業が2002年の選手権で国見に負けて準優勝したときのエースで、グランパスに鳴り物入りで入りましたが全然使われず、アルテ高崎を経て岐阜に戻って大活躍しています。とにかく中心選手を潰して守りを固めてカウンターです。この戦い方が一番この大会を制するのに適していたということは、あとでわかりました。J リーガーを何人入れてもこうなってしまうという、この大会の魔力というか不思議なところですが、誰もが予想もしなかった波乱の初日がこうして終わりました。

2日目は、ファジアーノ岡山対 FC 岐阜で、岐阜が、先ほどの片桐君の2ゴールで2-0と競り勝ちます。片桐の活躍もさることながら、このとき活躍したのが菊池という、見たことなかった選手です。ジェフェルソンをぴったりマークで抑えたわけですが、この菊池という選手も、あとから来た選手で、前所属チームは FC 東久留米で、東京都リーグ3部。4階級特進です。全国地域リーグ決勝大会でジェフェルソンを抑えてしまった。面白いでしょう、カテゴリーって何だろうと思います。この人もたまたま練習生として岐阜の練習に来ていて、「お前もうちょっとやってみないか」と戸塚さんが目を付け、この大事な局面で活躍しました。戸塚さんのスカウティング能力は凄いです。

一方で V・ファーレン長崎が PK 戦の末敗れるという大波乱がありました。これは V・ファーレンのベンチなのですが、奥から2番目は元セレッソの小林伸二さん、小嶺さんの島原商業時代の教え子です。V・ファーレンの場合は、選手を7人レンタルで入れていまして、小林さん含め8人です。V・ファーレンはどういうサッカーするかというと、基本的には国見高校と同じと考えていただいて結構です。今回レンタルした2トップをそのまま入れ替えました。アビスパの林選手とセレッソの小松選手です。2人とも身長180何センチ、つまりクロスからボーン、ボーン、ゴールというのを目指したのですが、これが見事に封じられ、PK 戦にもつれ込みました。しかも、非常に後味が悪い負け方で、PK 戦になり、キーパーが、これもレンタルでアビスパの塚本選手です。今回コーチ兼任で長崎のゴールマウスを守っていたのですが、最初 TDK の選手が外した時に、ラインをちょっと出ていたという判定でやり直しになりました。もう一回笛を吹いたら、今度はキーパーがパンチで止めたのですが、またラインを出ていたということでやり直しになり、そこでこのキーパーがぶち切れまして、ゴールポストを2回蹴りました。ああいうシーンを僕はたぶん初めて見ました。あの行

為は退場に値するものだと思いますが、結局イエローが一枚出ただけです。ここでもう精神的にガタガタとなり、6-7でTDKの勝利です。その結果、TDKが首位になりました。FC岐阜はこの日の勝利で2位に上がり、ファジアーノが3位、V・ファーレン4位。ただこの時点で、上位2チームに上がる可能性はどのチームもが有しており、数字上はV・ファーレンが岐阜に3点差以上で勝てばプレーオフまでは行ける、まだ絶望するわけではありませんでした。何回も言いますが、誰も予想しなかったスリリングな展開で最終日を迎えることになりました。

最終日は、またもTDKがPKで勝ちましたが、TDKの応援が結構来っていて、20人ぐらいいたのですが、最後は紙テープを投げて、カンピオーネ、カンピオーネと、地域リーグでカンピオーネかと思いました。V・ファーレンに岐阜が競り勝って、V・ファーレンはついに夢絶たれました。この泣いている選手は佐野裕也で、前所属がベルマーレです。ベルマーレを退団になった後、長崎に戻り、レジ打ちをしながらJFL昇格のためにがんばってやっていたのですが、夢を絶たれ、将来のことを聞かれても「まだ何も考えられないです」と言っていました。ある種、夢は必ずしもかなうものではないという象徴的なシーンでした。この結果、TDKが優勝、準優勝がFC岐阜、3位がファジアーノ、4位がV・ファーレンです。ここで改めて思うのは、このPK戦がなかったら、FC岐阜は文句なしに優勝です。TDKは1、1、3の5で勝ち点5のままで準優勝です。このPK戦がなぜずっと行われるのか、本当に改革の重要な柱として提示すべきだと思います。

PK戦の矛盾というものが、最後の最後に出てきてしまったというのがまず一つ。もう一つが、レンタル移籍についてです。今まで規制がなく、今後改める、あるいは制限を設けるという話も一部であるらしいのですが、この時点では何人入れても、それこそ11人全員が変わってもお咎めなしという状態でした。これは今後精査されるべきだと思います。あともう一つ。V・ファーレンとFC岐阜、最後の試合だったのですが、メンバー表を見てびっくりしたのですが、副審が22歳と21歳という、非常に若い2級審判でした。もちろん審判の良し悪しが年齢で決まるものではないはずですが、どのクラブにとっても、上がれるかどうか生きるか死ぬかでした。そういう風に非常にテンションの高い試合に、こういう若い審判を起用することに対して、僕は個人的に疑問に思いました。というのは、プレーしている選手は元Jリーガーが非常に多く、それに対して20歳そこそこの2級審判があいまいなジャッジをすることが何回もあり、そのたびに怒号が沸き、プレーは止まるという状況で、非常に殺伐としていました。主審は1級、37歳の方で、副審は21歳、22歳で、第4の審判が42歳という年齢でした。ちなみに、元セレッソの小林さんがこんなことを言っていました。「人生をかけた選手達がかもし出す雰囲気と、大会の運営度がマッチしていないし、追いついていない。地域の期待もあるのだから質を上げていかないといけない」と。

もともとはこの大会は、普通の社会人チームがJFL、全国リーグへ行くための大会でしかなかったわけです。非常に牧歌的なアマチュアのための大会でした。しかし、気が付けば、Jを目指すクラブがしのぎを削るJFLへの登竜門となってしまいました。にもかかわらず、先ほどの審判の例もそうですが、運営ひとつとってもまだまだです。最後の試合で長崎のサポーターが乱入しかけた状況があって非常に危なっかしかったです。柵がなく、紐一本でした。紐一本で大丈夫かと。性善説に基づいた運営が為されており、それで果たしてよかったのか疑問です。警備会社は雇われておらず、全部ボランティアでした。大分県協会のボランティアおよび地元の高校生が、ボールボーイやタンカ係をやっていました。こういう大会はよほど物好きな方でないとご覧になられないかと思いますが、このような状況でした。

以上が地域リーグ決勝大会のレポートで、ここから百年構想という話にシフトします。結局、TDKが優勝、FC岐阜はその後JFL18位の本田ロックと対戦し、アウェーで4-0、ホームで4-1の合計8-1の圧倒的勝利でJFL昇格が決まりました。

## 【全国リーグの歴史－3つの波】

宇都宮：改めて百年構想を考えた場合、おらが町にクラブがあるということはわかり易いと言えます。

そもそも1992年にはこれだけの府と県にしかJクラブはなく、それが2006年になるとJがある都道府県がこれだけ増えました。今後まだJを目指そうというクラブが30ぐらいあるそうです。今、それだけの地域でJを目指す、目指そうとしているクラブがあります。つまり、ほぼ全ての都道府県にJを目指すクラブが出来つつあるという状況が、ここ15年ぐらいの間で進んでいます。あちこちホームページからエンブレムを引っ張ってきましたが、確認できただけでこれだけありました。もちろんこうやってチームの名前を付け、エンブレムをつくってみたりとかは結構簡単にできます。実際にこれがクラブとして運営して、Jまで行くととなると、決勝大会の話を含め、シビアな話が待っています。こういう風な状況になったきっかけ、Jクラブが増えていった歴史には、3つの波があったのではと考えています。

その前史として、日本サッカーリーグが1965年、昭和40年に立ち上がったところから考えます。僕はクラマーさんが東京オリンピックを経て、より日本代表が強くなるために全国リーグを立ち上げ、そこで切磋琢磨しなければいけないという意見を取り入れて、JSLが立ちあがったと認識しています。

最初は10チームでした。もちろん企業チームであり、企業の福利厚生によりサッカー部があり、それが全国レベルでリーグ戦をやることになりました。こうしてみると重厚長大で、高度成長期を象徴するような顔ぶれです。

牛木：補足をします。一つは、日本サッカーリーグという名前についてです。これは当時、非常に珍しいことです。日本サッカーリーグではなくて、日本社会人サッカーリーグあるいは日本実業団サッカーリーグといった名前でしたら、素直に命名できた名前です。実業団とも学生ともついてないリーグというのは、外国としてはドイツリーグとかイングランドリーグとなっていますが、日本では当時は珍しかったわけです。その下に関東リーグを作ろうというときに、協会は関東社会人サッカーリーグという名前にしようと思いました。僕は理事会の当日に協会へ行って意見書を出しました。日本サッカー協会の小長谷さん（亮策＝東京教育大OB）という理事が担当だったのですが、原案の「関東社会人リーグ」を潰して、関東だけの「関東リーグ」にしてもらいました。しかし関西は、僕が関西へ行って説得する元気がなかったので、「関西社会人リーグ」になりました。日本リーグもリーグ名に「社会人」が入ってないところがひとつのポイントです。

もう一つは、日本リーグを作るときに、大学チームが入ってもいい、ということになっていました。選手が学生というだけでなく、大学単位のチームでも良いということでした。強いチームを集めようという趣旨だからです。実際に大学に呼びかけましたが、入ろうといったのは早稲田だけでした。早稲田は、工藤さんという方が監督で、入ろうと言いましたが、早稲田の中で反対も多く出て、結局、会社チームだけになりました。

もう一つ。日本リーグの加盟メンバーの中で、最初、候補が1チームもなかったのが関西です。ヤンマーが入っていますが、ヤンマーは入れるために急遽強化したチームです。レベルとしては入る資格はないと思われたのが、東海の豊田織機と名古屋相互銀行です。東海地域から2つ入れてくれとってきたので、関西も1つは入れようということになりました。東京の御三家といわれた古河、日立、三菱それに東洋と九州の八幡はともとの強い会社チームでした。

宇都宮：全国リーグというものを考えた場合、ヨーロッパは百年近く昔からスタートしているわけですが、日本の場合は国土が南北に非常に長いです。これは長沼さんがあるインタビューで答えていましたが、新幹線ができたことが大きかったのです。皆、サッカーだけでなく、入社しなければいけない、日曜日に試合があれば、翌日朝には席についていないといけません。そういう中で、大体新幹線が止まる所にクラブがあります。長沼さんは、日曜日試合を地方でやり、戻って風呂を浴び、

席について新聞を広げたら、昨日の自分が出た試合結果が新聞に載っていた、と話していました。

そこから最初の波として、皆さんこういう新聞広告覚えていますか、ちょうどバブルのときです。Jリーグの新聞の全面広告で、竹豊、プロゴルファーの青木、千代の富士とかサッカー以外の有名スポーツ選手にサッカーボールを持たせ、新しいサッカーリーグが始まるという、かなり派手な広告でした。Jリーグが始まり、ジーコ、リトバルスキーもいました。最初の試合の翌日の新聞がこれで、「これがサッカー、これがJリーグ、見せた世界の技」かなりの衝撃でした。日付は5月19日です。

その次の波は、ワールドカップです。特に有名な例はアルビレックス新潟で、ワールドカップがなかったらたぶんできななかったクラブとして、大分トリニータを例とすることができます。これを端的に言うと、ワールドカップを招致するにあたり、まずスタジアムを作り、スタジアムを作ったなら、スタジアムの恒久的な利用としてクラブがほしいということです。常識的に考えたら、順序が逆だと言わざるえない部分もありますが、日本の場合非常にうまく行ったと思います。新潟にしても、大分にしても、それまでなかなかサッカーが根付く状況ではなかったと思います。大きいスタジアム作ってどうするのかと不安視する人も沢山いたと思いますが、現実問題として非常にうまく行っています。

ワールドカップが終わり、ポストワールドカップを考えた場合、もうこれ以上Jリーグのクラブが生まれ、大きなスタジアムを作るといったことは非常に難しいだろうと言われていたのですが、第3の波が今です。ワールドカップという祭りは終わりましたが、いま全国津々浦々でJを目指すクラブが誕生し、それを守り立てようとする人がいます。道は非常に厳しいですが、これだけのムーブメントとして新たにJクラブを創ろうという動きがあります。これは何だろうと考えた場合、一つは、地方の時代がやっとこの様な感じで来たということです。地方の時代と、政府が散々言ってきましたが、なかなかリアリティーがありませんでした。それが、サッカーチームを作る、Jのチームを作るといったスローガンを掲げることで、「地域に根ざした」というものをはじめてリアルに捉えられたのではないのかと言えます。そういうわけで、僕が今まで取材したいくつかの地域リーグの現状、特徴を最後に紹介します。

## 【各地域リーグ紹介】

### <九州リーグ>

今Jリーグ入りを標榜しているのが、ニューウェーブ北九州、V・ファーレン長崎、ヴォルカ鹿児島といったチームです。これが一昨年、V・ファーレン長崎の九州リーグ最終節取材に行ったときの写真です。この時V・ファーレン長崎は九州リーグ3位に終わりました。これがV・ファーレンのクラブハウスです。V・ファーレンは、小嶺さんのクラブと違って差し支えないです。クラブの立ち上げ、メンバー集めから全部、小嶺さんの教え子、教え子のまた教え子とかいう形で繋がっています。監督の岩久保さんは元国見高校で、高木琢也の一つ下です。初めて国見が決勝に行ったときの選手で、最後東海大が相手で、アデミール・サントスのフリーキックにやられたと言っていました。その隣が原田武雄、元フリューゲルスです。今、35ぐらいで、ここに来てまだがんばっています。小嶺さんはサッカー界のみならず、長崎の経済界にも非常に影響力をもっている方です。僕が聞いた話で、胸ロゴが親和銀行というのですが、地域リーグの場合、チームによっても違うのですが、Jリーグだと億はしないとと思いますが、ここは二千万です。J2と同じぐらいです。小嶺さんの教え子の一人が、この親和銀行に営業に行って、「すみません、あと一週間でユニホーム作らないといけないので決めてもらいますでしょうか。」と言ったら、小嶺さんはどこまで本気かと聞かれたそうです。それで、金額を言ってくださいと言われ、二千万ぐらいですと言ったら、もう即決だったそうです。その前に小嶺さんが親和銀行の頭取と話していたらしいのですが、それくらい小嶺さんは凄いなど、改めて感じました。



僕が行ったときが定年の年で、確かNHK長崎がずっと追いかけていて、もしかしてあれも選挙の布石ではと、思ったりもしました。

### <北信越リーグ>

ここは激戦区です。ツェーゲン金沢、フェルヴォローザ石川、松本山雅、AC長野パルセイロ（旧エルザ）とあります。パルセイロとはポルトガル語でパートナーという意味だそうです。しかもこれだけではなくて、2部から上がってきたヴァリエンテ富山、福井にある2部のサウルコス福井、先ほど紹介したジャパンサッカーカレッジという強敵がいます。ところが北信越リーグの来年の全国切符は1枚で、もう地獄のようなリーグです。僕が取材したのはツェーゲン金沢ですが、ここは人工芝のグラウンドで練習しています。先ほど紹介したV・ファーレン長崎もそうですが、基本的に地域リーグは土のグラウンドで練習するのは当たり前です。V・ファーレンも国見高校のグラウンドを借りています。ちなみにツェーゲン金沢は星陵高校のグラウンドです。星陵高校の監督の河崎守さんがブレインの一人としてバックアップしています。もともと石川という土地は雪がよく降りますから、人工芝を敷くというのは強化のために必要だったと思います。その人工芝を借りて、学生がメインでやっていますが、うまい具合にまわしています。もう一人、中塚先生の先輩、桜ヶ丘高校の越田さんと河崎先生が、タッグを組むような形で強化しています。越田先生は元日産で元日本代表です。教員になるために日産をやめて、加茂さんからあほかと言われ、教員試験を受け、学校の先生をやりながらツェーゲン金沢をバックアップしています。宮澤ミッシェルさんもアドバイザーをやっています。

### <東海リーグ>

ここを代表するクラブはFC岐阜、静岡FCです。この2チームは非常に対照的なクラブです。FC岐阜は2005年までは東海2部で、チームとして岐阜県リーグに登場したのが2001年。そこから2005年に1部に昇格し、2006年にJFL昇格する。超特急のように上に上がっている勢いがあるチームです。追い抜かれたのが静岡FCで、今回が5回目の全国へのチャレンジだったのですが、叶いませんでした。このチームは納谷一族がほとんど仕切っているクラブです。ただ静岡FCも、天皇杯の試合を見に行きましたが、びっくりするほどサポーターがいません。日本平に試合を見に行きましたが、声を出しているのが3人でした。同じ日にJリーグがあったというのもありますが、静岡県といえば既に、清水エスパルスとジュビロ磐田というビッグ2がある中で、静岡FCは第三の静岡のクラブで、競合しています。それに対して岐阜の場合は、西濃運輸というクラブが旧JSLにあり、その後旧JFLでも活動していました。しかし、98~99年に解散して、岐阜には全くトップのクラブがないという状況が続いていました。岐阜は一方で、近くに名古屋グランパスがあり、必然的に名古屋グランパスを応援していたわけですが、いつしかグランパスもトヨタスタジアムができてから長良川競技場で試合をしなくなり、まったくサッカーの息吹が感じられなくなる中、うまく間隙を突いて人々の心をつかんだのがFC岐阜です。だから一気に人気も出ました。FC岐阜は地域リーグでありながら、1万人突破した試合があります。4部リーグで1万人です。それまで九州リーグで5千人はすごいと言っていたのが、去年FC岐阜はその記録を塗り替えまして、5桁をマークしています。FC岐阜がある意味別格だと思ったのが、他の地域リーグのクラブの場合、土のグラウンドで夜の練習が圧倒的に多いのです。理由は簡単で、皆働きながらやっているからです。ところが岐阜の場合は昼にやる方法に、戸塚さんが来た時に変えました。昼間に芝のグラウンドを借りてやるという、普通のJクラブと変わらない様な体制でやっています。要するに戸塚さんの視線とは、今は地域リーグにいるけれど、もう地域リーグのレベルに合わせても仕方ない、僕らは本格派を目指す、ということを常日頃言っていました。

これは最終節、雨が降る中でサポーターにあいさつをする森山です。彼の凄い所は、2004年にグランパスを解雇されて、それから当時東海2部だったFC岐阜に自分から連絡して移籍しているところです。別にお金の問題ではありません。トップリーグにいた人間がいきなり5部です。もともと森山は

岐阜出身の選手で、高校が帝京です。要するに岐阜に強いチームがないから、自分は強い学校に行き上手になりたい、彼が岐阜から他県の高校に行く先駆けだったそうです。その後かなり岐阜出身の選手が流出するようになり、それに対して彼は実は負い目を感じていて、岐阜で選手を育てて、日本にあるいは世界に通用するような選手を育てないといけないと思い、自分は何ができるかと考えたとき、もう一回故郷の岐阜に帰ってきました。森山が入ってから加速度的に推進力を得た、と誰もが口をそろえて言います。もう一つ、例えば元Jリーガーが沢山来てくれているのは森山の人徳によるところが非常に大きいとも聞いています。彼は「子供たちのために」という言い方をよくします。子供たちのためにクラブがあると。少年犯罪とかのニュースがよく岐阜発で流れてくるので、相当心を痛めたという話を聞きますし、地元チームの選手が地域の子どもたちの見本にならなければいけない、というのが彼の主張です。サッカーやっているやつにはちゃらちゃらしがやつが多いと言われるのは、絶対に避けなければいけない、このチームは茶髪、ピアス、タトゥー厳禁です。だらしない格好はするな、常に子どもたちは見ていると。その彼の主張が地元の新聞に取り上げられて、CoCo 壺番というカレーの会社、岐阜の会社で、CoCo 壺番の社長がその新聞を見て感動して、ぜひスポンサーになりたい、ただしお金ではつまらないから物をあげたいと言い、バスがほしいと言ったら、中古だけどバスをくれたそうです。それをFC岐阜カラーに塗りなおして、遠征で大活躍しているそうです。JFLに上がったら、新車プレゼントという話もあるそうです。

## 【総括】

このように、今4部リーグが非常に激動期にあり、全国津々浦々でJを目指そうというクラブが出てきている中で、評価すべき点と問題点が見えてきました。評価すべき点は、FC岐阜の例で言ったような事、プラス元Jリーガーの受け皿としてです。この人ここにいたの?という事が当たり前になって来ています。要するに、選手が循環している。新しい選手が沢山入ってきて、首を切られる選手が沢山います。年齢的なものではなく、3年目、高卒21歳ぐらいで切られる選手が沢山います。その中でもう一回、余りお金は払えないけれど、うちに来て一緒に上を目指さないかという再チャレンジの仕組みが図らずとも出来てきた、というのが地域リーグを見て感じることです。

当然課題もあります。練習環境が非常に未整備なチームが圧倒的に多いです。JFLは高いハードルで、何度も地域決勝大会で落ちしまう。それ以前に全国に挑戦するチャンスすらない、といったクラブは、ずっと地域リーグで持ちこたえられるのでしょうか。いずれスポンサーも離れるでしょうし、周囲の人たちの熱気も薄れて行ってしまう可能性も非常に高いです。沢山エンブレムも見せましたが、あのクラブが10年後も残っているか、ちょっと怪しいなど僕は感じています。スポンサー確保は難しいところです。地方に行けば行くほど難しさは感じると思います。あとは選手の生活保障です。僅かながら生活費を支払っているクラブ、アルバイトを斡旋するようなクラブ、勝手にやってくれというクラブもあります。いずれにせよ、元Jリーガーに、再チャレンジのチャンスを与えていることは評価できる点だと僕は思います。しかし一方で、選手達の夢、情熱に、言葉が悪いですけども、感けて、それに依存してしまっただけで放漫経営に近いことをやっているようなクラブもいくつか目に付きます。

「百年構想最前線」ということで、今回は地域リーグ決勝大会をご紹介します。レベルは、Jリーグとは比べるべくもなく低いですが、その中で非常に感動するシーンもあり、考えさせられることも沢山あります。ここで行われていることはある意味、今の日本サッカー界の現状というのを非常に明確に映し出しているのではと感じています。

## 【ディスカッション】

### ■かつては教員リーグだった地域リーグ

中塚： 以前、東京教員クラブの一員として関東リーグでプレーしていました。たまたま僕がこの教員になった年に、東京都リーグを抜けて関東リーグに昇格したのですが、3年ぐらい関東リーグでやっていました。その時の関東リーグはほとんど教員リーグで、東京教員、茨城教員、千葉教員、栃木教員…。アウェイゲームは地方の芝生のグラウンドでやり、ホームゲームはここ、筑波大学附属高校の土のグラウンドで、マウンドがある中でやっていました。当時、関東リーグは一つしかなく、1部、2部ができたのは最近でしょう。練習環境は週1回、ナイターで学習院大と練習試合をするといったやり方でした。その後、東京教員は都リーグに落ちたけれど、ルミノソ狭山とがどんどん下から上がって通り抜けていったのを見てきました。よく東京ガスとも試合やったけど、東京ガスっていまFC東京ですよ。

不明： ガスサッカー部はまだあります。

宇都宮： 例えば京都パープルサンガが京都紫光クラブと袂を分かれてあるし、中央防犯もアビスパになったけれど、一応まだ福岡に有ります。

中塚： 教員チームが母体になって、形を変えて残っている所は？

宇都宮： 栃木がそうですね。あとはなくなった対馬FCです。

## ■選手のレンタル（期限付き）移籍をめぐって

牛木： 選手のレンタルの話がでましたが、どういう形でレンタルするのですか？

Jリーグなんかのレンタルとは規則が違うような印象を受けて聞いていたのですが……。レンタルはいつでもできるのですか？

宇都宮： あれは、クラブ間で、クラブ間というより個人のコネといった方がより正確かもしれません。基本的に金銭は発生しないようです。

牛木： 僕が言うのは金銭の話でなくて、選手登録の問題です。一つのリーグ戦を戦っている時に、いつでも選手をレンタルできるのであれば、2部に落ちそうになったら急遽レンタルする、優勝できそうだったら急遽レンタルすると言う事が起きます。ですから移籍期間の制限という規則が必要ですが、今の話だと大会に出る直前に補強するのですか？

宇都宮： まさしくその通りです。11月くらいから、というのは優勝争いとか昇格、降格争いが佳境になる時期です。その中でもこの大会が終わるまでという契約期間で引っ張って来みたいのです。トップチームでは出番がないというJクラブ側の判断をもとに、それだったら選手を遊ばせておくよりも、選手にそこでごんばって来いと送り出すみたいです。

牛木： それは規則の不備があるのではと思います。選手移籍、登録変更の制限は本来、日本サッカー協会が全国的にやるべきもので、それが今はないのかなと思ったのですが。

宇都宮： ないみたいです。あるクラブからは、これは日本サッカー協会に訴えたいぐらいだという監督さんもいたぐらいです。僕の印象ではノータッチに近いようなイメージです。

牛木： やはり、今のお話を聞いているとレンタルの問題に限らず、大会の組織に問題があるように思います。大会の主催者はどこなのですか？例えば社会人サッカー大会は社会人サッカー連盟が主管するわけですが、この大会は誰が主管しているのですか？

宇都宮： 主催は日本サッカー協会と全国社会人サッカー連盟です。

牛木： そうするとサッカー協会と連盟には全国的に統一された移籍規定みたいのがないといけないと思います。審判の問題、PK戦の問題でも、特別なことがこの大会だけ行われているというように僕は聞いていて思ったのですが、そうなのでしょうか。ほっといて良いのですか。宇都宮さんはどういうふうこれを改革すべきだと思っているのかと聞きたいところです。

宇都宮： ご指摘の通りで、僕はそこでまだこういう風に改革すべしというところまでまだ行っておらず、単純に、ローカルルールに驚きながらも、それに理解して、まずは取材していたという所で止まっています。正直これに関しては、記事として次のサッカーJプラスという所で今

回の記事をまとめるにあたって、自分なりに一回、牛木さんにご指摘いただいたようなところを租借して提案型でまとめたいなと思っております。

牛木： 僕も研究してないのでわからないけれど、サッカー協会の移籍規定などを含めて検討しなければならぬと思います。

## ■プロとアマチュアをめぐって

牛木： 念のためにちょっと付け加えますと、先に日本リーグがあってJリーグが出来ました。そのころに武豊たちを使った広告がありました。広告は博報堂がつくったのですが、あの一連の広告のコンセプトは、「プロフェッショナル」だということを強調しようということなのです。今まで人気なかったが、プロになれば人気が出るだろうと、プロを作ることを必要以上に強調しようとしたのです。それで他のスポーツのプロ選手を使ったわけです。博報堂さんはそういうこと上手ですから。いままでアマチュアはアマチュア、プロフェッショナルはプロフェッショナルだったのに、一挙にサッカーでもプロがある、というのを見せようと思ったからああいう広告になりました。それは非常に効果をあげたのですが問題もあります。というのは、サッカーではプロとアマチュアを分けないのが原則です。Jリーグは、社団法人日本プロサッカーリーグというのが正式名称ですが、プロサッカーリーグという名前をつけているのは、アメリカに過去にありましたが、本来は、サッカーの世界では「プロリーグ」という名称はおかしいのです。そういう点では本来はプロとアマチュア区別しないで一緒にやっていたものを、あえてプロフェッショナルと名乗った。そこに弊害もあるわけです。

宇都宮： 今日あまり触れなかったですが、JFL が今まさにそのプロとアマチュア混在しているような中で全国リーグをやっているわけです。しかも JFL というのとは一番移動距離が長いリーグです。北はソニー仙台から、南はFC琉球まで、沖縄まで行くのです。プロと呼ばれるクラブであっても、まだ予算規模が小さいですから、岐阜もまだ大変ですし、アマチュアはもっと大変です。例えば栃木 SC は飛行場行くまでが大変です。これもいずれ、J3 が本当にできるかどうかわかりませんが、そろそろプロとアマチュアといったことを、地域リーグもそうですが、JFL からまず移行していかなければいけないと感じています。

牛木： 僕は J2 以下のリーグ再構築が必要だと思います。J2 もまだいまはチーム数が半端ですから。J2 以下の組織の再編成、再検討という事が必要です。それをどういう風にやっていくか、チーム数の問題もありますし、J1 と試合数も違うということも起こっています。これはあまり一般的な話ではないけれど、非常に重要な課題です。今のお話の中で思ったのは、組織全体の構成、J2 以下、どういう風にピラミッドを再編成するかという問題が一つある。それからプロとアマチュアを分けている問題がある。例えば J1 でプロの登録が何人いなくてはいけないという規則があります。これはおかしいのじゃないか。プロでもアマチュアでも、何人いても良いのじゃないか？ JFL であっても地域リーグであっても、プロもいてもいいしアマチュアもいてもいい。それで経済的に成り立てばいい。なぜブラジルなどでリーグが成り立っているかという、ほとんどがセミプロだからです。そういう欧州や南米のやり方が、日本の労働環境の中、年功序列賃金で支えられている中で成り立つかどうかということがひとつの問題です。選手のステイタスの問題です。それから三つ目に、今お話を聞いて非常に変えなくちゃだめだと思ったのは、地域のチームが、J を目指すと称して、上ばかり見ていることです。上を見たって一年に 52 週で、その中で例えば 30 週くらいをリーグに使えるとすると、一つのリーグで入れられるチームは理想的には 16 チームぐらいです。ホーム・アンド・アウェーの往復で試合をやるとそれで 32 週使います。多くてもせいぜいで 20 チームか 22 チームです。そうすると J1 と J2 で、20~22 チームずつでも、J に入れるチーム数は限られてくる。そのほかの地域のチームは、どうしても下のほうになってしまいます。チームが

たくさんあるのですから。上に将来上がる道があることは非常に必要なことですが、チームを運営、経営する者としては、上に上がることを当てには出来ません。選手が上を向くのは良いのですが、チームの経営としては、たとえばFC岐阜の経営としては、上を見るよりも地元を見なければいけません。岐阜のチームとしては、J1でなくても、地域リーグ、県リーグであっても、岐阜にはこれだけのファンが付いていて、みんな観に行く。そういうふうドイツの田舎町のチームと同じような考え方で行かないと成り立ちません。J1の選手のための受け皿で再起のための足場だと、上を見ているばかりの考えでは、地域のチームは成り立たないと思います。この3つが、お話しを聞いた感想です。

## ■上昇志向をめぐる

宇都宮： 今日ちょっと言い忘れたのですが、Jリーグを今後どうして行くかの話の中で、2010年までにはJ2を18チームにしようと、去年の今頃出されたと思いますが、あれが一つ火をつけたという部分があります。2010年までに何とかJ2にたどり着きたい、今どこのクラブもそこを目標にしてやっています。それが象徴的に影響として現れたのが、今回の全国大会、あとは本当に地域に根ざして、どのカテゴリーにあっても支えるサポーターが常にいないと、成り立たないと言うのはその通りです。いままだ熱に浮かされて上へ上へという状態は、そのクラブとしてはそうやって煽っていかないと人が集まって来ないということで、そういったビジョンを出していると思いますが、それが後々になり、したずさりになるような所についていないチームの方が圧倒的に多いと感じます。

中塚： 上へという行き方は、一つは、チームがどんどん昇格してJリーグ入りを目指すということで、クラブのトップチームの目標としてわかりやすいものです。けど経営のことを考えると、Jリーグ入という目標を掲げるには無理があるというクラブはいっぱいあります。そこで、もう一つ別の行き方を考えればよい。それは、地域リーグで力を蓄えた地域の財産（選手）が、一つ二つ上のステージに移籍していくというような上への目指し方であり、例えばFC岐阜の選手が柏レイソルに移籍した事例などを通して、こういう行き方があるということも多くの方が理解するようになればいいのではないのでしょうか。移籍金も入って経営的にもすごくいいことだと思いますし。地域レベルのクラブが生きて行く方法が、日本的なスタイルでも可能なのではないのでしょうか。

牛木： 中塚先生がおっしゃったのは、南米などで過去に行われていたスタイルで、僕は非常にいいシステムだと思います。しかし、現実には選手の保有権の問題が厳しくなって不可能になりつつあります。もうEUでは出来なくなっています。たとえば、岐阜で育てた選手は、岐阜に保有の権利があるということにはならなくなっています。契約期間により、例えば一人の選手を5年契約して3年使い、残りの2年の契約を売る事はできますが、過去のように選手をそのクラブで育てたから、契約が無くても無条件に保有権があって、他のチームに譲ったときに無条件で対価を得られるというふうにはいま日本でもなっていません。いまJリーグでは、中間的な規則は作っています。ブラジルやアルゼンチンでは昔、小さなクラブが選手を育てて、大きなクラブに売って稼ぐというようなことをやっていました。マラドーナをアルゼンチンのジュニアースがバルセロナに売った時は20億円入ったわけです。そういうことが今は出来なくなりつつある。選手の保有権が無条件では認められなくなっています。非常に難しいところです。

## ■移籍金をめぐって

参加者： 今回の移籍は移籍金が出ていますか。

山田： 池元選手は岐阜は12月末までのレンタル移籍で、NW北九州が権利をもっていて、多分移籍

金は発生するではないでしょうか。

参加者: それは北九州に行くわけですか。

牛木: 今回のケースの移籍は、契約を譲渡すると契約の残存期間の権利を譲るための移籍金が出ます。契約が終わった後の移籍金はどのぐらい払うかと言うと、Jリーグの中ではわりと細かい規則があります。でもEUでは認められないような規則です。

参加者: 今回の移籍金みたいなものは、クラブチーム間で、例えばTDKの選手がほしいと、そういうようなことが行われるかもしれないのに、もともと所属が違うじゃないですか。社会人のクラブ活動でやっている、会社員だとか。

宇都宮: わりとJFLから一人昇格って結構あって、ホンダFCから宇留野が甲府へ行きました。

参加者: そういうのは出すほうとしては、自分たちの形態が違うから何とも思わないのでしょうか。

牛木: TDKの選手は皆、社員なのですか。

宇都宮: 社員ですが今回、元Jリーガーが何人かいました。大友という選手は元々アントラーズのユースで、その後ドイツザールブルクヘンでテスト生になって、喧嘩別れしたとこで戻ってきて、うちで練習しないとTDKに誘われ、とりあえず住むところと食べ物くらいはという形です。この後TDKの社員になる、他のチームに行くとか、その時点では何も考えていなかったと言っていました。その大友がFC岐阜戦で決勝ゴールをあげ、今回昇格に大きく貢献したと考えるとちょっと不思議な話ですけれど。

牛木: 今回の質問は、社員である場合はどうなのかということなのでしょう。社員であったときは、移籍はどうするのか……。

宇都宮: 個人の問題の問題では、やはり。そのままプロになるかとか。

参加者: 転職するのと同じように。

牛木: 会社辞めるわけですね。

田中: なでしこもそうですね。TASAKIの川上が会社員を辞めて。あの時の移籍金は。

宇都宮: なかったと思います。あれは川上本人がもっと自分を高めたいということで、自分で辞めてもちろん何人かに相談して、プライベートのこととして処理されています。

牛木: これは昔からある問題で、大古というバレーボールの選手が日本鋼管にいて、それが引き抜かれて松下電器かどこかへ行きました。そのときに会社を辞めて移るのは職業の自由です。だから日本鋼管を辞めるのは彼の自由です。会社側の日本鋼管がクビにするのは、不当解雇で問題になりますが、働いている方が辞めるのは自由です。松下電器が雇うのも自由です。だけどバレーボールのチームを移るのはそれとは別、というのが国際バレーボール連盟の規則です。そして当時、日本バレーボール連盟では所属チーム間でトラブルになった場合は2年間の出場停止でした。だけど結局日本では永年雇用ですから、会社辞めたのをチームに置いておくわけにできず、結局は話し合いで解決しました。もちろん松下と鋼管の間で、お金のやり取りはないですけど……。というのも、スポーツの所属と会社の所属と、いわば選手としての身分と労働者としての立場は別だという考え方です。それを例えば地域リーグのチームをやるとき、セミプロでなければチームが成り立たないという時、どこに勤めているのかとどのチームにいるのかは別だということで考えないと、この話は成り立たないのです。

矢野: 今回の話になりますが、会社を移るとき、大古が移るときに協会の規則をあてはめ、こうしたわけですか。

牛木: もちろん。バレーボール協会の規則があったわけです。

矢野: バレーボールの規則の方が法律違反のような気もしますが、問題にならなかったですか。

牛木: それは問題にならなりました。

矢野: どこに移ってもいいし、移ったところのバレーに入るも自由だと、たぶん思いますが。

牛木: いやそれはそうでなくて、日本鋼管へ勤めるのを辞めて松下電器に移るのは自由です。けどチームとしては別に職業ではないから、職業の自由はそれには当てはめられない。

矢野: 彼は職業としてバレーやっていたのではありませんか? 会社の仕事はしてないはずです。

牛木: いやそうではなくて、内容は知りませんが、会社員です。

参加者: 所属はしていいが、リーグの規則で出られない。

矢野: 僕はきっと裁判をすればリーグの規則が法律違反ということになったと思います。

参加者: そうなると、お金あるところに全部集まりますね。

矢野: 社会人だとそうなるでしょう。

中塚: リーグの協定みたいのがあるのでしょうか。似たようなことは高体連でもあり、学校を移った場合は、半年出られないという約束事があります。それはサッカーの話なのですが、別の話で柔道では一年かかるらしく、そのルールがどこでできたかという、山下さん(泰裕)が九州学院から、2年生か3年生になるときに東海大相模に移りました。これが大きな問題になったらしく、今、九州のみかもしれませんが、1年間です。

宇都宮: 引き抜き防止ってものでしょうね。

矢野: 今の話し聞くと、学校も企業も、スポーツを看板にしているわけです。それを引き抜かれると、企業の広告塔みたいな価値もあるし、学校経営としても。今なら裁判になるでしょう。

牛木: 今言ったのは国際的な規則で、IFのほうで規則があります。サッカーでもそうですが、IFの規則があります。例えば僕の経験した話では、ラモスを読売クラブに入れるとき、ラモスが来たいといっても読売クラブに自由に採ることはできません。それで、日本のサッカー協会を通じ、ブラジルのサッカー協会に、ラモスという選手が日本に来ることになっているが手放すという証明を出してくれと問い合わせました。それは今も行われていることで、自由に外国の選手を引き抜けるわけではないのです。ラモスの場合、サンパウロのサッカー協会からそんな選手は登録してないと言われました。登録してなければ自由です。

中塚: 必ず移籍承諾書をやりとりするのですね。

## ■地域に根ざしたクラブ育成をめぐって

依藤: 少し話題を変えて、以前この大会は社会人チームが主で、クラブチームは少数でした。ここ最近ではクラブチームが主になり、クラブチームっていっても実際はクラブを作っているわけではありません。いきなりチームをつくり、それをJリーグにあげたい、興行会社が新しくできるような感じで捉えています。それを毎年繰り返して、チームを作っても昇格できなければ、5年ぐらいで消滅してしまっています。百年のJリーグの構想でも、百年続けても何も現状は変わらない。

矢野: ここへ来た人は皆サッカーファンですが、僕は野球ファンです。サッカーに少し仕事で関連していて、野球ファンとサッカーのファンがいつ頃逆転するのか、最近野球が落ちてきたので、おそらく10年ぐらいで逆転するのではと僕は思います。例えば東京ドームへ行くと、ファンから見ると圧倒的に野球のほうが幅広い、親子、恋人同士、女の子同士、男の子供たちが来ています。あのファン広さ、底辺の広さは凄いです、サッカーの方はまだまだです。言い方悪いけれど、ほいほいと若者がやってきて、先ほども警備がないと暴力的になるだとか。10年早いのかなと思ったり、意外と10年でこうなったから、もう10年でプロ野球を追い越すのかなと思ってみたり。皆さんどういう風に思っていますか。

中塚: 依藤さんが言ってくれたこと、僕も結構気になっていて、いろんなチーム名が出てくるけれど、クラブユース連盟にかかわっていないながら、これと同じ名前前のユースチームをあまり聞いたことがありません。今回参加しているチームは、下部組織を持っているのか、持とうとする意思はあるのか。地域に根ざした育成環境をつくろうとしているのかなど。そういうのが

うまくいくと、今言われた野球との逆転現象、本当に底辺から支える人がサッカーの方から増えてくるのではないかと思います。

牛木： 今の地域のチームは、興行会社がやっているようなもので、地域に根がないというお話でしょうか。しかし、例えば国見が核になっている、星陵が面倒見ているというクラブは、そういう風になっていく望みがあるのではと思います。皆さんどうですか。

宇都宮： 下部組織という話ですね。

牛木： 下部組織と言うより、ひとつのクラブ、会社じゃないかと。企業だったら上へ行かなくては、5年で潰れてしまうから百年構想どころじゃないという話でした。ユースのクラブもないという話でした。その一方、星陵、国見がやっているというのがあるのだから、地域と結んでユースを含むクラブができつつある、と見ることはできないか。どうでしょうか？

宇都宮： まず、地域により違いますが、長崎に関しても石川に関しても、まず高校でサッカーが強いというのが一つ。高校が全国で名をなしているという実績があるが故に、まずノウハウが蓄積され、いい指導者、OBがいる。加えて良い施設が、国見の場合は土ですが夜間照明があります。そういったものがある所で、あくまでもきっかけであったりサポートであったりという所で、いま強豪高校のノウハウとか施設を借りるような形で一緒にやっているというのがあります。まだ育成という部分に関しては後回しになってはいますが、育成という部分を設けておかないといけない、もちろんスタジアムの条件、それがJに上がる条件となります。

牛木： ユースの話とこんがらがってしまいましたが、僕が聞きたいのは、例えば星陵高校、国見高校、あるいはそのOBが核になったクラブが地域に根付いて行くことはできるか。そしてそれがFC岐阜のようなトップのチームを育てることが出来るだろうか。例えば中南米でユニベルシアード・デ・チリとかユニベルシアード・デ・メヒコとかいうようなプロのチームがあります。もともとは大学から始まっています。それと同じように、日本であれば高校からはじまるというようなことが出来ないでしょうか？

宇都宮： Vファーレンは近い将来できます。ただ学校単位よりも小嶺さん個人なのです。小嶺さんの人脈、影響力。小嶺さんがいないと、いくら国見が強くてもあそこまでなったかは疑問です。

中塚： 学校を核にするスタイルは凄く可能性があるように思います。高校サッカーも依然として盛んで、国見をはじめそれぞれの地域に拠点となる学校があり、そこから次から次へ優秀なOBが出てくるサイクルがある、それをうまく活かせば、色んなところで可能性がある。

宇都宮： 岐阜は、岐阜経済大学が凄く良い全面人工芝の施設をもっています。そこで子供から大学生までを集めて総合型のスポーツクラブを作り、そのトップとしてFC岐阜を、そういう形になっています。将来的にそれをユースとして取り込むということは考えています。それも学校という組織、大学なのですが、学校としてうまくっと開放して利用した上で、将来的なクラブ、総合的なクラブにしていこう、そういう発想的な元で。

牛木： 必ずしも会社みたいな企業で、5年たったら潰れるような企業というわけでもないですね。

矢野： 今に関連して言うと、私、香川県出身で、四国リーグという野球ができています。5月に観に行き、お客さんが200人ぐらいで大変なのですが、好意的に受ける人が多いそうです。今年、巨人に一人入ったと思います。批判もあり、オリックスの中村監督は反対と言います。元々、プロ野球の選手は一線級の選手になれるやつとなれないやつは格差が随分大きく、ああいう所で、自分の力でプロになれると幻想をもっていつまでもやっていたら、そういうのになれない素質の選手の一生を台無しにすると。だからああいう弱いところのチームをそんなに期待しちゃいかんと。だから、あんまり宣伝しすぎないほうがいいと、中村監督が言います。そういう意見もあるのかということに僕も感心しました。

宇都宮： 四国アイランドリーグは、四国リーグの取材したときに思ったのですが、最初の年はすごく



盛り上がったのですが、2年目、3年目に人気は下降気味だそうです。入場料が千円なのですが、近くの農家で取れたミニトマトとかを貰えます。聞いた話では、みんな地元の選手ではなく、他県から、四国以外から来ている方がむしろ多いらしいです。

矢野：そこが弱点で、地元の高校の選手が出ていたら応援したくなるのですが。でも、知らないところから来ている、気が乗らないというか、そういうものもあります。

宇都宮：外国人選手もいますね。どっからきたのでしょうか。結構劣悪な環境で、屋根がないし、みんな日傘さしていました。

## ■長野県の事例より

塩沢：下部組織の話が出たので参考になるかわからないですが、クラブの紹介になってしまうかも知れないですが。先ほどAC長野パルセイロというクラブ紹介していただきました。元々十数年前からあったクラブですが、強化を始めたのはここ2、3年の頃です。昨年ジュニアユースのチームが立ち上がりまして、一期生が来年度中学3年生でジュニアユースを持っています。あとはサッカースクールという形で地域に対し、スクール活動を行っています。ジュニアユースはスタッフが会社勤めで、私は学生で関わらせてもらっていますが、仕事の都合もあったりします。やはりどこのクラブもまずトップで手一杯、下部組織になるとマンパワーだったり不足します。そういった部分はこれからついていくのか、逆にそういうところがしっかりできているクラブがそこから先へ、やっぱり地域の中で根付いて、伸びていくのではという感じがします。我々のクラブは大体、一学年コーチが2人、あとは統括する事務の関係やってくれる人が一人、監督一人で、あとはトップチームの選手は時間があれば、サッカースクールのももちろんそうですが、見ていただくという形をとっています。

あとクラブのポイントとして、監督が今年の途中から、ブラジル人の監督のバドゥ・ビエイラさんという方が来まして、コスタリカの監督、クラブチームの監督をやっていた方です。皆さん多分名前は知らないと思いますが、98年のワールドカップ予選、日本がジョホールバルでイランに岡野のゴールで勝った、その相手チームの監督がバドゥさんでした。

参加者：どこから連れてきたの？

塩沢：これはクラブの広報誌に載っていたことなのですが。横浜FCの監督をやってらっしゃった足達さんがクラブのアドバイザーで、その足達さんとバドゥさんがケルン体育大学で一緒だったらしく、バドゥさんは新たなチャレンジをしたい、若い選手を育てたいということで来ていただいたそうです。

宇都宮：長野に住んでいるのですか。

塩沢：はい。子供たちへ影響もすごく大きいですし、トップチームの選手へ対しても大きいと思います。一番は地域へ対してというか、消防団の一日署長をやったこともあり、長野県はプロのスポーツチームがないですし、JクラブもJFLクラブもないので、そういう地域にとっては大きいのではと思います。

中塚：そのクラブのことは地元の新聞やテレビが取り上げてくれるのですか。

塩沢：長野県だと松本山雅FCとAC長野パルセイロが松本と長野にあり、新聞社は信濃毎日新聞社という新聞社があり、その信毎が両方のスポンサーになるような感じですが。松本版だと松本のホームゲームの場合はマッチデープログラム、長野版だと、長野の様子が載ったりします。あとはケーブルテレビです。

宇都宮：僕が聞いた話では、長野と松本では文化が全然違うと、もともと藩が違ったのでしたか。同じ長野のクラブではあるが、まったく違ったアイデンティティを持った、歴史をもったクラブ。長野ダービーっていう盛り上がり。

塩沢：その辺はよく言われます。筑摩と信濃というのがあり、私はそこまで意識はないのですが、

やはりそういうことを言う人は何人かいます。年度当初に長野にいた選手が山雅に移り、そう言ったことがありました。3 節目ぐらいまでは長野にいたのですが、それ以降は山雅に移りました。そういう要素はかなりあるかなと思います。

中塚： では最後に、宇都宮さんから。

宇都宮： 本年もよろしくお願ひします。皆さんいろんなお仕事のある中でサッカーに関わってらっしゃると思いますが、今年もそれぞれの分野から日本サッカーを盛り上げていきましょう。